

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02279

研究課題名（和文）中世物語絵画における女性表象の生成と変容に関する研究

研究課題名（英文）A study on the modeling and transformation of female representations in narrative paintings of medieval Japan

研究代表者

水野 僚子（MIZUNO, Ryoko）

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：30469209

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中近世の物語絵画に描かれた女性像の生成と変容の様相を、身分や階級、年齢、ジェンダー、民族の視点から探り、それを体系化することによって、その意味や機能の多様性を明らかにした。データベース作成、作品調査による細部の検討、物語・史料の考察を総合的に行った結果、女性表象は、文学の多様化に伴い、聖的で象徴的描写から、世俗の女性の身体性が具体化へと関心が移り、放漫な乳房や白くふくよかな手足、長い黒髪等が「性」を明確に区分すると共に、社会的なジェンダーの記号として物語に機能していること、身体に付された多様な意味は、読み手の価値観に働きかける重要な表象であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

物語絵画に描かれた女性像に関する分析や考察は、巨視的には中世の人々の思想や宗教観等、文化的背景をも考察する手立てとなる。また、本研究が目指すのは、従来見逃されてきた女性像の意味や作品全体に果たす役割を改めて見直し、それを個々の作品研究に還元・応用することから、美術史の発展にも寄与するものと考えられる。さらに重要なのは、本研究が文学、歴史学、民俗学、文化人類学、ジェンダー論等、隣接諸分野と連携し、多様な視点から女性像の意味を捉えようとする学際的研究であることは、個々の絵巻の新たな物語解釈を導き出すためにも重要であり、その結果は美術史や連携分野、そして文化史研究に資するところが大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：I explored the formation and transformation of female figures in medieval and early modern narrative paintings from the viewpoints of status, class, age, gender, and ethnicity, and systematized them and I clarified that the meaning and functions of female figures are diverse. I created a database, investigated any paintings, and examined the depiction of the female figure in detail. We examined the historical materials such as stories and historical materials too. As a result of its research, I found that over time, people's interests shifted from symbolic depictions to concrete representations of the secular female physicality. Big breasts, white and plump limbs, long black hair are expressed as female characteristics, and the "sex" of men and women was clearly divided. I clarified that such a female body functions as a symbol of social gender in the story, and the various meanings attached to the body are important representations that influence reader values.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術 中世 絵画 女性像 物語 ジェンダー 表象 絵巻

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ジェンダー研究が進展するにしたがって、人文学の諸分野において、「女性」に着目した研究が徐々に高まりを見せ、歴史学では、中世の「家」社会の確立や政治権力に女性というジェンダーが重要な役割を担っていたことが論じられ、中世文学研究では、貴族女性の身体が性的に消費されるべきものとして、様々な文学で語られていることが明らかにされた。

美術史においても、池田忍『日本絵画の女性像 ジェンダー美術史の視点から』(筑摩書房,1998)を端緒とし、加須屋誠の仏教説話画の研究に見られるように、図像学的観点からも仏教説話画も描かれた女性像の意味や役割に迫った研究が徐々に積み重ねられていた。

申請者も「土蜘蛛草紙」「光明真言功德絵巻」「源氏物語絵巻」、中近世の「源氏絵」の女性像に注目し、その表象の意味と機能を探り、作品の制作意図を考察してきた。

一方絵巻に関しては、亀井若菜(『語り出す絵巻 「粉河寺縁起絵巻」「信貴山縁起絵巻」「掃墨物語絵巻」論』2015、ブリュッケ)によって、女性像に注目した作品研究がすすめられ、美術史研究の新たな展開が予感されるような時期でもあった。

このように申請者も含め、女性像に注目した研究は、個別の研究に留まっていた。女性像は、様々な絵画に描かれるが、特に物語絵画においては、重要な役割を担い、物語に重要な意味をもたらすものであると考えていたことから、女性表象をより体系的に捉え、描写の変容をたどることができるような体系的な研究の必要性を強く感じるようになった。

このように思うに至ったのは、男性像の研究の進展が背景としてあったからである。男性像に関しては、山本陽子(『絵巻における神と天皇の表現—見えぬように描く』2006、中央公論美術出版)が明らかにしたように、神仏や天皇の表象には顔を隠した表現が中世から近代に至るまで「継承」されていること、そのイメージは尊さの象徴として意味づけられていることなどがすでに指摘されていた。女性像においても、イメージの変遷をより具体的、そして時系列的に、そして体系的に捉えなおすことが必要であり、データの集積とその分析を通じた「型」の抽出、その「型」が示す意味や機能を探ることは、個別の作品研究にもいかせるという点で重要な研究となると考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 古代中世から近世に至る日本の物語絵画において、女性の姿は物語の主人公として登場するだけでなく、生や死を象徴する「場」に出産や病、死体の当事者として描き込まれ、異界においても墮地獄の当事者、あるいは天女や龍のイメージが付された姿で描かれている。興味深いのは、女性像は特定の場(御所や天界)を示す象徴として描かれるだけでなく、美醜という価値観や性格の善悪までも表象するモチーフとして、物語絵画の中で機能していることである。しかもあらゆる場に、男性以上に様々な意味を付されて描き込まれた女性の身体は、時に「性的」「聖的」「美的」存在として、物語を語る重要なモチーフであるといえる。

このように物語絵画において重要な役割を担う女性像が、いかにして生成され、また物語とどうかかわりあいながら変容していったのか、そのイメージの生成と変容の有様を時系列的に明らかにすることは、個々の作品研究にも応用できる点で重要である。そこで本研究ではこれらを、積極的に問い直すことからはじめ、研究対象を古代中世から近世の物語絵画とすることで、時系列でとらえられるよう時代を広く設定し、それらを体系的に捉えられる分析検討を行うことを目的とした。またそれは同時に、個々の作品研究に新たな視点を提供することも目的としている。

(2) 本研究のもう一つの目的は、美術史、文学、歴史学、民俗学の研究者との連携による学際的研究を行うことにより、より広範で、発展的な研究とすることである。申請者は数年にわたり、文学、歴史学、民俗学、文化人類学、ジェンダー学の研究者との共同研究を継続して行っており、このような人的、学問的ネットワークは、女性像を多角的に捉えようとする本研究において、必要不可欠である。様々な視点からの助言を得ることにより、個々の絵巻の新たな物語解釈を導き出すことは、美術史だけでなく、文化史研究に資するところが大きいと考えた。

3. 研究の方法

中近世の物語絵画に描かれた女性の表象に着目し、そのイメージの生成と変容の様相を探るとともに、それらの表象が、女性の身分や階級、年齢、ジェンダー、民族とどう関わっているのかを分析するため、以下の手順で、研究を進めることとした。

(1) 女性像に関する画像データの集積と分析

まずは体系化するシステムとしてデータベースの作成を行うこととした。その際、時系列的に追うことができ、また具体的なイメージと、それにまつわる文字情報を同時に整理できるようなデータベースを目指した。データベースには、表象それ自体を説明する文字情報だけでなく、それを表すキーワードを抽出し、都度、項目を増やししながら、データベースの構築を継続して行った。なお、データベースの構築にあたっては、データベースソフト(ファイルメーカー)を用いた。

画像の分類に関しては(データベースの項目)、女性の身分、階級、年齢、美醜、装束、民族(異界のものや動物も含む)、描かれた場(地域)、しぐさ(行動)等、キーワードといった項目をたて、そのカテゴリーに従って画像を検索できるように構築した。また各項目によって分類も

行えるようにした。また、できるかぎり、それらを時系列に配列できるよう工夫も凝らした。

(2) 画像データの分析

相当量のデータが蓄積された段階において、作成したデータベースを活用し、女性像の生成と展開の様相、型 について考察を行う。時系列に沿い長期的な視点に立ち、イメージの引用がどのようになされ、また変容していったのかということを探った。

(3) 物語絵画の調査研究

本研究の基礎となるのは、絵画内容の詳細な検討であり、そのためには国内外での作品調査が重要となる。対象は、中近世に制作された絵巻、大画面説話画、経意絵等であるが、特に大画面説話画や近世絵巻に関しては良質の図版が乏しく、細部の写真を収集するには、作品調査が急務である。個別の作品調査に際しては、作品データの収集、細部表現や様式、技法の分析、制作年代や筆者の検討を行い、作品の美術史上の位置づけを明確にすることを旨とする。以上を元に、極力多くの女性像のイメージの集積を行った。

(4) 女性に関する文献史料の集成と検討

和文の物語や日記、説話、漢文の伝典などの中に残された女性に関する様々な情報を抜き出す。また、中近世の文学や日記・記録の中に、日常生活や様々な行事・儀礼の「場」において登場する女性の行動やしぐさを探り、画像データベースに反映できる場合は、データベースにその情報を加えていった。

(5) 考察と成果報告

上記(1)～(4)の作業とそれを通じた分析・検討を基礎に、時系列に並べた場合、いかなる傾向がみえるのか、検討を行った。

の結果を踏まえ、個々の作品分析を行い、物語や画面の中で女性像がどのような意味を生成し、いかなる機能を担っているのか、作品研究によって明らかにした。特に図像学的アプローチやジェンダーの視点からの分析も試み、画面の中の女性像の象徴的意味を明らかにすることを目指した。また制作者や注文主など、女性像の受容者の人物像を探るために、物語絵画全体を多角的な視点から詳細に分析、解釈し、作品全体の新たな意味や機能を考察した。研究成果は、研究期間中に学会発表や学術論文としてアウトプットする。データベースは継続して構築をすすめる。

4. 研究成果

当初三年間の計画をたてていたが、様々な要因により、研究に遅延が生じたため、1年の延長することとし、四年間をかけた研究となった。

(1) 本研究で最も大きな成果となったのは、女性像の研究の基礎となる画像および文字によるデータベースの構築である。女性の表象が描かれた作品、またその特徴をもとに、さらに身分・階級・年齢・美醜・装束・民族(異界や異類も含む)・場(地域・異界)・仕草(行動)・作品名・制作年・絵師(画派)を主なカテゴリーとした画像データベースの構築を行った。初年度は一人で作業をしたため、図版の収集、図書に掲載のない作品に関する写真原稿の所蔵先の調査、借用願、スキャニング作業、データ入力を並行して行うことに予想以上に時間がかかり、またデータベースの項目も作品ごとに増加・変更があり、統一がとれないまま進めていたため、構築自体に時間を割かれることとなった。二目以降は、研究補助員の雇用が可能となったことから、スキャニング作業がかなり進むようになり、最終年度までには、相当数のデータの集積が叶った。とはいえ、中世の絵巻や掛幅の女性像のデータはかなりの量が蓄積できたものの、近世の物語絵画に関しては、予想以上に数や種類が多く、実作品の調査をする毎に新たな女性像が出現するため、未だ完成にはいたっておらず、継続して構築を進める予定である。なお、近世に関しては、物語の種類や模本や類系本も多岐にわたり、また作品形態も掛幅・屏風・扇面等様々であり、しかも主人公を単独で描いたものや、一～二場面のみを選択して組み合わせた作品等も存在することから、現在はデータに作品名のみを入れ検討は保留としている。受容者層の問題も含め、比較対象の意義はあることから、いずれはデータ化すべきではあるものの、現在優先とするのは、絵巻や冊子等の物語全般が語られている物語絵画で、中世の作品との比較が可能である作品に限っている。今後検討しながら、データベースの構築は継続して行う予定である。

(2) 作品調査に関しては、1年目から3年目までは国内の調査に限って行い、最終年度に海外の調査を実施した。特に「八幡縁起絵」に関しては、その諸本や「神功皇后縁起」の諸本の相当数の調査が叶ったことは、類型となる絵巻の比較が可能となった点においても重要であった。特に、神功皇后のイメージの比較検討を行う中で、類系のない新出の「八幡縁起」を見出すことができ、しかも諸本には見られない特異な図像が発見できたことも、重要な成果であった。また和歌山市立博物館本「竹取物語絵巻」、国学院大学図書館本「竹取物語絵巻」をはじめする御伽草子・奈良絵本の調査も実施した。天理図書館に関しては調査ができなかったものの、奈良絵本に関しては、高精画像付きのコレクションの館蔵図録がシリーズとして発売されたため作品の分析検討に役立った。徳川美術館・五島美術館本「源氏物語絵巻」、「春日権現験記」(原本・模本)「石山寺縁起」に関しては、高精細画像データを用いた、彩色技法、顔料等の検討が実施できたことは大きな成果であった。

本研究における最も大きな成果は、アイルランドのチェスタービーティ ライブラリーにおける御伽草子絵巻、奈良絵本絵巻・奈良絵本冊子等の調査を集中して行うことができたことである。新型コロナウイルス感染の拡大の影響により、当初の予定よりも滞在が短くなってしまったものの、

相当数の作品の調査が叶ったことは非常に意義深い。特に当コレクションは優品が多く、受容者や製作者を考える上でも、非常に重要な作品であるため、実見できたことは本研究において重要な成果ともなった。『熊野の本地(冊子)』『竹取物語絵巻』『大江山絵巻』『玉藻の前(冊子)』『舞の本絵巻』等の奈良絵本の優品の調査では新たな発見もあった。例えば『熊野の本地』(冊子)には、類品とは異なる五衰殿女御の図像を見出し、「伏見常盤」(舞の本)からも女性の身体とジェンダーを考察する重要な示唆を得た。舞の本に関しては、多くの諸本が国内にも存在しているため、今後の調査が必要であることが分かった点は重要な発見であった。

一方、文字文献に関しては、『源氏物語』『伊勢物語』『栄華物語』等の物語、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『十訓抄』『閑居友』等の説話集、『保元物語』『平治物語』『平家物語』等の軍記物語、『とはず語り』『十六夜日記』等の中世随筆、『有明の別れ』『浅茅が露』『海人の刈藻』等の中世擬古物語、『愚管抄』『玉葉』『吉記』『明月記』『公衡公記』等の公家日記および天皇宸記を調査し、女性に関する記事をデータ化した。ただし、近世の文献は『公用日記』以外の、記録類、公家・天皇の日記類は時間の都合上確認することができなかつたため、今後の課題としたい。

(3)

研究成果の発表については、本研究と連動して実施していた近世職人尽絵詞(絵巻)を中心とした中近世の町人の表象に関しては、図版と詞書の翻刻・注釈を掲載した書籍の出版が発表できたことは一つの成果であった。また、「彦火々出見尊絵巻」の出産する女性(龍宮の姫)のイメージとその意味に関する研究は、国立歴史民俗博物館のジェンダー関連の共同研究の場において発表することができたが、論文にすることはできなかつたため、今後論文として発表することを予定している。また新出の「八幡縁起」に関しては、現在執筆を行っているが、来年度にドイツ・ハイデルベルク大学の資料・画像データベースの閲覧ができることになったため、その資料を検討した上で、更なる検討を行う予定である。なお、ハイデルベルク大学では、発表の機会を与えられており、日独のいずれかで論文の発表を予定している。

なお、現在、国立歴史民俗博物館で開催予定の企画展「性差(ジェンダー)の日本史」(2020年10月6日~12月6日予定)の展示プロジェクト委員として展覧会の準備をしており、図録に「病草紙」「駒競行幸絵巻」、女性の往生者が描かれた「刺繍阿弥陀来迎図」の女性像に関する考察を執筆した(入稿済)。その関連で、「髪繡」に関する調査を進めており、その製作には女性が関与していた可能性が考えられるため、今後さらなる研究をすすめ、史料による分析や考察も行い、論文として発表したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 水野僚子	4. 巻 128-5
2. 論文標題 2018年の歴史学界 回顧と展望 日本・中世・美術	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史學雑誌	6. 最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野僚子	4. 巻 第28号
2. 論文標題 中世の絵巻にみる乳房の表象 「源氏物語絵巻」における雲居雁の身体表象の意味と機能	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 人間社会学部	6. 最初と最後の頁 189-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 国立歴史民俗博物館編（横山百合子 義江明子 仁藤敦史 松本直子 田中禎昭 小島道裕 久留島典子 伴瀬明美 辻浩和 池田忍 水野僚子 柳谷慶子 村和明 長志珠絵 廣川和花 森下徹 福田千鶴 松澤裕作 加藤千香子 田中禎昭ほか）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立歴史民俗博物館	5. 総ページ数 -
3. 書名 性差（ジェンダー）の日本史	

1. 著者名 大高洋司・大久保純一・小島道裕 編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 鍬形蕙齋画近世職人尽絵詞 江戸の職人と風俗を読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

展覧会図録『性差（ジェンダー）の日本史』国立歴史民俗博物館編の「第二章中世」を担当。図録は共同執筆。
展覧会においても、展示プロジェクト委員として参加。中世の展示コーナーを美術史研究者として担当。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----